The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | ソクラティク・ダイアローグ : 理想とは何か |
| Author(s) | 堀江, 剛 |
| Citation | 臨床哲学ニューズレター. 2021, 3, p. 35-37 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/79246 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集２　2019 臨床哲学・哲学プラクティス国際セミナー＆ワークショップ

# ソクラティク・ダイアローグ――理想とは何か

堀江　剛

セミナー＆ワークショップでは、「哲学対話演習」として、慶北大学哲学科の大学院生７名を参加者とした二日間（7 月 30－31 日）のソクラティク・ダイアローグ（SD）を行なった。進行役は堀江が務め、日本に留学している韓国人留学生の同時通訳を介して、模造紙に日本語と韓国語を併記するかたちで進めた。事前にテーマを設定せず、イントロダクションで SD の説明をした上で、自己紹介とともに、参加者ひとりひとりが話してみたいテーマを挙げることから始めた。

SD で探求してみたいテーマとして、参加者から「感情を抑える／抑えない」こと、「人を助ける」こと、「諦め」について、また「哲学的思考と日常生活との（無）関連性」などが挙げられた。一通りテーマを出した後、今度は、それぞれが提示したテーマに関する具体的な経験・体験を「例」として出し合うことにした。友人との間の喧嘩の例（感情を抑える／抑えない）、カウンセリング（の実習）をしたときの割り切れない気持ち（これで「人を助けた」のか）、また難解な哲学のテキストに挑戦して「諦めた」経験など、哲学と対人援助の両方に関連したものが多く出された。参加者たちは、哲学科の大学院生として（例えば現象学、ニーチェ、仏教哲学などを）勉強しつつ、同時に哲学相談・哲学治療・哲学対話の教育研究プログラム助成を受けていることから、哲学を「どのようにして生活に役立てるか」を考えなければならない。そのような環境の中での暗中模索が映し出されているようにも思えた。

テーマと具体的体験・経験を出し合う作業が終わった後、進行役はグループとして一つの「問い」とそれに関連する一つの「例」を選ぶよう促した。グループで最も関心が寄せられたテーマは「感情」や「人間関係」に関するものであったが、例としては、哲学のテキストに挑戦した話がシンプルで分かりやすい（探求しやすい）ので、それを軸に対話を展開してみたいという結論になった。通常の SD では「例 example」の提示とともに「中心になる問い main question」も定式化するのであるが、今回は適切な「問い」が明確に定まっていない状態で、まず「例」を参加者の間で共有することに専念し、その過程で「問い」の定式化を試みることにした。選ばれた「例」は、おおよそ次のような内容である。

ある時期、私（例の提供者）は「迷いのない・乱れのない心の境地」とは何かに強い関心を持ち、それを感得しようと、主に仏教関係のテキストに取り組む努力をしていた。その境地を探ろうと、仏典に挑戦し、それを徹底的に理解してやろうと意気込んでいた。しかしテキストは難解で、簡単には理解できない。実のところ、さっぱり理解できないものが多すぎた。そのため、仏典の読解に挑戦したのはいいものの、だんだんとそれが苦痛になってきた。なぜ、私はこのような（わけのわからない）テキストに取り組んでいるのだ

ろう。それは苦行のようである。苦行を通して「迷いのない・乱れのない心の境地」に至ると言われるが、それは本当なのだろうか。それにしても辛い。

そうした中で、あるとき私は次のように考えた。今、必死で取り組んでいる仏典読解を諦めよう。そうすれば、心は穏やかになるのではないか。仏典読解という辛い作業を止める。これがある意味で「迷い・乱れない心の状態」なのではないか。実際、この作業をきれいさっぱり止めたとき、私の心は非常に穏やかになった。そのことで、なんとなくではあるが「迷い・乱れない心の状態」が何であるかを知ることができたと感じた。

グループは、体験の細かな状況に関する質問のやりとりを通して、この経験を共有することに努め、私は進行役として、この「例」を詳しく模造紙に書き出した。その作業の中で、たまたまではあるが、参加者の一人が「この例は、何か理想的な状態を望んでいる。理想とは何なのかを考えてみたい」といった発言をした。ここで「理想」という言葉は、最初のテーマ出しの場面では現れていなかったものである。この例は、もともとは「諦め」というキーワードの下で出されたものであった。しかし例を詳しく共有する過程で、参加者たちはこの「問い」に強く刺激されたようであった。ここで私は、あらためて「理想」という言葉をキーワードにして、SD の「中心になる問い」を定式化してみてはどうかという提案をした。

書き出された物語は、不思議な例である。理想を求めて努力する（難解な仏典と格闘する）のであるが、その努力の結果ではなく、逆にそれを諦めることで、なぜか理想（のようなもの）が達成されている。グループでは、「理想とは何か」「理想とはどのような状態か」「理想を達成するとは、どのようなことか」などといった問いが示されたが、どうも納得できない。この例では、確かに理想（のようなもの）を望んではいるが、普通の意味での（努力の成果という意味での）「理想達成」の語りとは少し異なっているからである。

グループは、例に即して「問い」を定式化しようとする中で、次のような事柄について議論し始めた。「理想を望むこと」と「何らかの（計画や意識化を伴った）プロセスの中で達成されるもの」を、単純に結び付けることはできない。理想の本質（理想とは何か）は、少なくとも「理想を望むこと」のうちに宿ってはいるが、それと「何らかのプロセス」とは異なる。もし「望むこと」と「プロセス」が一致しているとすれば、それは「理想」という言葉の意味から外れたものになってしまう。例えば、あるものを望んでいるとして、それが計画通りのプロセスを経て達成されると分かっているとすれば、それは「理想」ではなく、単に「目的・目標」と呼ばれるものに過ぎないのではないか。

こうして「理想の本質」をめぐる議論は白熱していったが、肝心の「中心になる問い」の定式化には至らない。そうこうするうちに、SD を終える時間も迫ってきた。私は、時間がなくなってきたという理由で議論を打ち切り、次のような提案をした。ここで中心になっているキーワードは、明らかに「理想」である。私の考えでは、すでにグループは「理想とは何か」をめぐって十分議論を展開している。そこで問いを「理想とは何か」にした上で、その答えに当たるものをこれまでの議論の中から整理して定式化してはどうか。今までの議論の中で、すでに「答え」に当たるものを、みなさんは掴んでいるのではないか。

グループも、この提案に従って「答え」を求めようという流れになり、次のような「問い」と「答え」の定式化に至った。

問い： 理想とは何か
答え： 理想とは「理想を望むこと」のうちに潜む、計画されたり意識されたりするプロセスによって達成されること以上のものである。

参加者全員が、この定式化に満足したわけではない。しかしほとんどの参加者が、具体的な例に基づいて「理想とは何か」をこれほど深く考えることはなかったし、それは貴重な体験であったという感想を口にした。私個人としても、初めて SD を体験する参加者たちばかりであったが、哲学科で学んでいることもあるのだろうか、論理的で「言葉の意味」に対する機敏な反応と的確な対話が実現できたように思う。当初、共通言語による対話／進行ができない中でどうなるかと心配していたが、通訳の協力と「ゆっくりした対話の進行」を意識することで、いつもの SD のような「対話によって哲学する」ことの意義と楽しさは十分伝わったと感じた。